

## 2022口語詩句新人賞総評

林 桂

十編一組の応募形式は、一編一編で審査するのとは違った景色が見えてくる。いずれかの審査員の佳作判断に残った作品で構成されているという意味では、どれも粒ぞろいに違いないが、その十編をとおして、どのような作者像を結ぼうとするのか、自選力が問われる。

第四回と回を重ねたことで、どの作者の作品も洗練されてきて、レベルも向上してきている。また標準化されてきている。

その中での審査は、僅差を何に求めるかという作業となる。この僅差の発見に審査員の様々な視点が注がれて、発表のような結果となった。

入賞の方々を祝福したい。賞は新人賞である。これを飛躍の切っ掛けとした今後の活躍を期待したい。また、賞は一つの方法であり、その結果も絶対的なものでもないだろう。それをどう受け止めて、今後の超克の道のりに生かすか。その中にこそ賞の本当の意味があるに違いない。新人賞、優秀賞、奨励賞受賞者、また惜しくも入賞を逸した者の孰れが真の新人であったか。今後の活躍の中にこそ答

えがあろう。期待して見守りたい。

私個人の審査の過程は次のようなものであった。僅差を顕在化するために、作品それぞれを点数化し、その総計の上位者を推すこととした。結果、四人が同点であった。これは他の選考員との推薦総計の上位四人と一致する結果でもあった。

その四人の中から、特選で推したのは、奥村俊也（長谷川柊香）氏（氏名は発表名簿による。審査段階では名は伏せられている。以下同じ）である。しかし、同点の新人賞最終候補の二名に奥村氏が残っていなかったため、二次推薦では橋田純寧（こはくいろ）氏を推した。「新人賞」に相応しい新鮮さを評価したからである。残りの一編は、吉沢美香氏であった。

四氏の印象に残った作品を記す。

・長谷川柊香（奥村俊也）

段ボール持つ  
りんごの重心を集める

バリケード越え難民となる春の雪  
ゲーセンに卒業の花抱え入る

・こはくいろ（橋田純寧）

キーボード、  
青春に鍵をかけてくみたいに叩く

かかとから私が消えてゆく浜辺

匿ってくれよ。  
匂う夕陽のさみしさは、  
ため息たちを包むつぼみだ

・郡司和斗

電話がまだ  
うつくしかった季節に  
よく靴を磨いた

会いたいと同じくらい  
会えなくていいと思う  
林檎しゅかっとなる

・吉沢美香

日焼け止め振って  
水たまりの気持ち

血液が耳まで届く冬の虹

以下、奨励賞受賞者の印象の一編。

・立花ばとん（梶伸太郎）

ホルンの曲線  
ぼくは立ち上がる

・中矢 温

いいハムも棄てる亡父の冷蔵庫

・永山逢海（永山愛望）

遠い海  
親とはぐれた子鯨を  
きゅーいきゅいい  
と励ます列車

・空いう子（江藤裕子）

退職のブーケの蕾だった薔薇

・山本先生（山本巧）

綿虫の空が大きく暮れてゆく

・豊富瑞歩

夕焼けを眺める人の目の中に  
抜け道があるかもしれないよ

なお。入賞を逸したが、次の作者を推したことを付記し、印象に残った一編を

記す。私にとっては入賞となんら遜色ない作品であり、作者であった。(順不同)

・加藤万結子(平間美紀)

犬も白髪になることを知った  
お前も子育てをしてくれたよね

・マズルカ(渡邊早紀)

越して来て  
地方ニュースを  
見て笑い  
風呂に浮かべる小さなあひる

・佐藤潤華(佐藤慎也)

暗いワンルーム  
向かいの家の蛍光灯が  
ジャムみたいに窓に滲む

・香取小春(井口寿則)

友達が帰った後の飲みさしの  
グラスを洗う その日の流星

・宮本浩(長戸孝太郎)

赤ちゃんの広めのおでこ綿帽子

・高橋ちひろ（金田理紗）

葉脈の一番端で  
空に触れる役になりたい  
僕は墓守

新人賞の郡司和斗氏は、応募者の中で、最も長く投稿を続けて来られた方であろう。その継続的努力を讃え、それが実を結んだことを祝福したい。

第四回目にして、学生が初の新人賞となった。また入賞者も学生が多数を占める。高校生がこれらの作家に伍して遜色がないのも新しい景色である。

新し才能の発掘が進んでいるという実感がある。